

研究区分	教員特別研究推進（地域振興）
------	----------------

研 究 テーマ	河井家文書と日本政治（河井重蔵・弥八を中心に）				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
	研究協力者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	森山 優
		所属・職名	千葉大学大学院国際学術研究院 ・教授	氏名	見城 悌治
		所属・職名	静岡県近代史研究会・会員等	氏名	北原 勤ほか 2名
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	森山 優

講演題目
『河井弥八日記』1939年より
研究の目的、成果及び今後の展望 本研究は、掛川市に残されている河井家文書を手がかりに、明治期と戦後の日本政治を中央・地方の両側面から多角的に照射し、政治史・地方史における新境地を開拓するものである。 本年度は、『河井弥八日記』1942年通年分の索引作成作業を完了した。さらにいくつかの史料を復刻して追加し、武村貴族院守衛長が作成した『中支那方面皇軍慰問団日誌』を写真版にて掲載した。本日記は、大学院ワーキングペーパー#2025-01として出版され、図書館リポジトリにもアップロードされた。 1939年は、9月に第二次世界大戦が始まった。まさに、この時期であり興味深い記述が見受けられる。その直前8月末にはドイツの独ソ不可侵条約締結という背信行為があったが、弥八は憤るより日本の孤立化を深刻に懸念していた（ちょうどノモンハンで日ソ両軍が衝突していたこともあるだろう）。弥八は外交関係の講演会には欠かさず出席しており、国際情勢への目配りを欠くことはなかった。ナチスとソ連に蹂躪されたポーランドに対しては、極めて同情的である。 中支（5月）に続き11月には、国内の傷病兵慰問に熱心に取り組んでいる。応召兵に対する敬意は並々ならぬものがある。それに対比するように、いわゆる国体論者や軍人が天皇に対する敬意を払っていないことを鋭く批判している。天皇の侍従次長として仕えた弥八ならではの。戦地では、日本の思い上がりに対する批判的な憲兵の声などを記録しており、弥八の見識と情報収集能力の高さを示している また、地元においても、多額納税議員の立候補について調整したり（7月の日記補遺）、静岡育英会の寄附金集めのため浜松市を訪れて多くの名士に寄附を要請する（11月）など、精力的に活動していることが確認された。